

地獄の思想

映画文学人生論

梅原猛 (1925-)

『地獄の思想』(1967) 「中公新書」

『笑いの構造』(1872 「角川書店」

『隠された十字架 法隆寺論』(1972) 「新潮社」

『水底の歌 柿本人麿論』(1973) 「新潮社」

人生は苦である。苦とはなにか。釈迦は、苦を四苦あるいは八苦で考える。

梅原猛の『地獄の思想』によれば、人生は苦である。苦とはなにか。

釈迦は、苦を四苦あるいは八苦で考える。四苦は生老病死、八苦はそれに加えて、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊衰苦。彼はイエスのように、死後の世界に希望をつなぐ人ではなかった。

真理がその説の通りなら、地獄は人間が死んでから三途の川を渡っていく所ではない。生の苦、老の苦、病の苦、死の苦——つまり、生まれてから死ぬまでのこの世に地獄のような苦がある。

インドに地獄の思想が入ってきたのは紀元前十世紀頃で、釈迦の時代には地獄の思想は民衆の間であまねく普及していたが、釈迦は積極的に地獄を説きはしなかった。地獄は釈迦本来の思想ではない。彼は自分の説を説く方便として地獄の思想を用いたかのようにみえると、梅原猛はいう。

地獄の思想はインドから中国を経て日本へ入ってきた。梅原猛は地獄の思想の書として、『往生要集』、『源氏物語』、『平家物語』をあげ、さらに世阿弥の「妄執の霊ども」。近松の「死への道行き」、宮沢賢治の「修羅の世界を超えて」、太宰治の「道化地獄」を論じている。いずれも百八煩惱の地獄を描いた文学である。

しかし、釈迦が考えたのは苦である。人間はどうしたら苦しみをまぬがれることができるか。そ



地獄の思想

映画文学人生論

これは苦しみの原因をとりぞくことだ。その原因とは欲望である。欲望をほろぼせば、苦しみはなくなる。と釈迦はさとつた。

それには欲望をほろぼす正しい方法が必要だ。知恵をみがき、行をつつしみ、心をしずめること。によって欲望をほろぼせと釈迦はいう。

だが、生きている人間が一切の欲望を断つことができないだろうか。食欲、貪欲、性欲、排泄欲、睡眠欲、権力欲、名誉欲等々。凡人にはムリだ。

絶望するしかない。絶望の果てに死にたくなってくるが、死にたいという望み（タナトス）も欲望だ。その欲望が邪魔になる。一方、死にたくないという不老長寿の望みもかなえられない。人生は、けつきよく、老化であり、病気になることであり、死への道である。

せめて死後は極楽浄土へ往きたいと、ナムアミダブツとなえても、それも欲望にすぎない。望み通り極楽浄土へ往けるかどうかは疑問だ。イエスは死後の復活を約束し、法然や親鸞は浄土を約束してくれているようだが、釈迦は死後の極楽浄土を約束してくれてはいない。

けつきよく、欲望をほろぼすしかないのだ。根絶するのは不可能だとしても、欲望が少なくなれば、それだけ苦しみも少なくなる。

世の中は地獄の上の花見かな 小林一茶